

協励アカデミー 令和6年度 第2回漢方・皮膚セミナーレポート

開催日 2024年(令和6年)8月4日(日)
開催方法 Zoomによるオンライン配信(配信元:協励会館)

●漢方

指導講演
東京中央・フジモト薬局
馬場 英二先生
「漢方基礎講座」

●皮膚

指導講演
千葉・一心堂薬局
佐藤 勝利先生
「夏の皮膚病」

2024年(令和6年)8月4日(日)、協励アカデミー令和6年度第2回漢方・皮膚セミナーが協励会館を配信元にZoomで行われました。初めに研修室長の辻伸常任理事より挨拶があり、その後協励十訓の唱和を行いセミナーが開始されました。

まず指導講演として「漢方基礎講座」と題し、東京中央・フジモト薬局の馬場英二先生にお話しいただきました。冒頭で馬場先生は、『ボク曰く集』(荒木性次先生)に掲載されている基本的な気味と薬能について、例えば汗を出させ表を整える桂枝(辛温)・筋肉のこわばりを和らげる芍薬(苦平)・黄連(苦寒)・黄芩(苦平)等をしっかり覚えることで、方剤の組み合わせが理解でき、条文にある処方の意味が理解しやすくなることを教示してくださいました。

症例として、20年以上冷たいものを取り続け、腹水が14Lたまっ

ていた方は、アルブミンがつくられておらず、アルブミンを増やすために田七人參、活血藤、牛黄製剤、菌糸体で改善されたとのこと。腹水がたまるのは、肝にうつ熱がたまっている(冷えの裏には必ず熱がある・陰陽虚実寒熱)ということで、肝硬変には田七人參や牛黄で熱を取るのが良いということをお教えいただきました。

一日中続くせき(はらい)には紫蘇や厚朴が入っているものを使用すれば改善され、夕方以降の激しいせきには、うがいしながら麦門冬湯を服用すればよく、食欲がない場合でも胃の働きを強める粳米が入っているので、食が細い人でも大丈夫とのこと。また妊娠中で葛根湯などの麻黄が使えない方でも桂枝湯や麦門冬湯は使用でき、つわりにも効くということ、就寝前麦門冬湯を服用すると、体表の熱が身体の中に入っていくのを防いでくれること、『金匱要略』の麦門冬湯にも書かれているように、半夏(辛平)で水を動かし、人參(甘微寒)で胃腸に働きかけ虚熱を取り、粳米で胃の働きを強めること、エアコンで表を冷やしたために肺に熱が入ってしまった場合、柴陷湯が熱を取り、気管支にへばりつくようなせきにも効くこと、もしくは半表半裏の熱を取る小柴胡湯も当てはめられるとのことでした。

暑がりやで痰の絡みがなく、喉が渇き空せきをして額に汗をかく場合には、麻杏甘石湯が合うこと、石膏(辛微寒)がこもった熱を追い出す働きがあるが、その場合冷たい飲食物は控えることをご教示いただきました。

昨今生理不順の女性が多く見受けられ、例として手にはほてり、手足、腰、おなかに冷えがあり、唇が乾燥している場合は瘀血おけつと考え、温経湯が良いこと、手足、腰の冷えには腎虚の冷えと考え苓姜朮甘湯(神経症にも効果あり)、さらに加えてめまい、頭痛、動悸どうきがある場合は、水の滞りなのか冷えなのか、熱からなのかによって方剤の選択が分かれ、呉茱萸湯の頭痛、桂枝人參湯の頭痛も考慮に入れなければならないこと、生理が長く経血が多い場合にはプラセンタ製剤も考慮に入れることをお教えいただきました。

頭が重く覆い被さるような感覚は、頭冒として『金匱要略』の痰飲たんいん咳嗽病篇がいそうびょうに記されており、尿の色調によっても考慮すべきであること、当帰芍薬散の方剤は当帰(甘温)、芍薬(苦平)、茯苓(甘平)、白朮(苦温)、澤瀉(甘寒)、川芎(辛温)でお酒(おちょこ一口程度)を服用し、基本的には四季と二十四節氣に合わせて3カ月が目安とされていることもお教えいただきました。



東京中央・フジモト薬局 馬場英二先生



千葉・一心堂薬局 佐藤勝利先生

これらを服用した方は生理が順調になり、妊娠後は当帰散（茯苓、澤瀉→黄芩に代えた処方）を服用し、肌がとってもきれいな赤ちゃんが生まれたとのことでした。

新型コロナウイルス感染症や湿疹、じんましんが多い傾向の土運太過期間中は、ペットのネコやイヌにも動物生薬や、術後の感染症予防に牛黄、クリプトシアニンO.A.コンプレックス成分の錠剤などをすりつぶして少しハチミツで練り合わせ、乾いた鼻に塗布することで改善された例なども紹介していただきました。

回復には五行と食養生が大いに関係しており、例えばごま（甘平）とごま油（甘微寒）でも症例が異なってくること、ごま油は頭や顔などの陽気が一番強い箇所を用いるほか腸内の熱を取ることで、枳実芍薬散などを服用する際は、大麦（鹹温）のオートミールをおかゆにして一緒に服用すると良いとのことでした。

次の指導講演は「夏の皮膚病」と題して、千葉・一心堂薬局の佐藤勝利先生に治験を中心とした対応例や季節に応じた対応をお話しいただきました。

まず皮膚の構造について、皮膚は暑さや寒さ、紫外線、刺激物、毒物などから身体を守る働きを担っており、また体温と水分の調節を

行っていること、暑い時期の湿疹の約7、8割は「蒸れ」から生じているので、特に足にできた場合は通気性の良い靴下を着用したり足自体を程良く冷やせばよいこと、またゴム手袋で作業していると表皮のバリア機能が弱り、外部から皮膚疾患の原因となる物質が入り込みやすくなってしまふこと、エクリン汗腺分泌部は、真皮下の血管から吸い上げ汗孔から汗を放出するが、この汗の管や出口が詰まってしまうと汗疹や汗疱ができてしまうこと、これらの場合人参製剤や丹参製剤で巡りを良くする方法が考えられることを教えていただきました。

湿疹の紅斑期では、毛細血管が膨らんで血液が集中している状態なので、まずは冷やした上で弱いステロイド軟膏から使い始めること、湿疹の三角形の図、紅斑期→丘疹期→小水疱期→膿疱期→びらん期→結痂期→落屑期……治癒→苔癬化に至るまでのどの期の症状かをよく観察して対処していく必要があることもご教示いただきました。

湿疹・皮膚炎は赤み、痒みがあり、健康な皮膚との境界線が不鮮明、時間の経過で左右対称の部位に発症しさまざまな状態が混在することが特徴で、患部の広がりが多いもの、例えば植物かぶれには刺激の少ないワセリン、もしくは

プラスチックベース（ゲル化炭化水素）基剤のものが良いということ、逆に水虫かぶれは放置したり、クリプトシアニンO.A.コンプレックスで皮膚の再生能力を上げる方法も考えられること、イッチ・スクラッチ・サークル（痒みの悪循環）に入る患者さんは栄養がきちんと取れていない場合が多く（インスタント食品等の偏り）、栄養補給として「ペプチド製剤」プラス「保湿成分AHYP（アセチルヒドロキシプロリン）」などで補うと良いことを教えていただきました。

夏の暑い時期においては、体温調節や代謝に関わる身体の水分量が要となること、加齢とともにエクリン腺自体が萎縮し発汗そのものが減少してくるので、適度に、かつこまめな水分補給が大切であること、また夏に多いマラセチア毛包炎は真菌が原因であり、背中や胸にできる赤い発疹は汗疹やニキビと間違えやすく、特に見極めが必要となることもご教示いただきました。

最後に馬場先生、佐藤先生ともにお客さまを通り一辺にさばっているのではなく、じっくりと問診、聞診、望診した上で薬を決定していく認識を持つことが大切だ、と述べられました。

（レポーター 学術研修委員 竹内一郎）